

私の体験と心の記録

吉岡 三哉

太平洋戦争の末期、サイパン島が陥落してその年の暮（昭和十九年十月頃）から毎日B29による偵察が行われ一万メートル位の高空を白い飛行機雲を引いて悠々と飛んでいた。今では航空の飛行機雲は常識だが当時はまだ珍しく、今にも墜落するのではないかと何時までも見ていた。結局墜落しないで飛び去って行った。

十月を過ぎると、夜間一、二機で毎月末空襲するようになり、しかも三、四時間おきに来るようになって空襲警報が鳴ったり、解除されたり、頻繁になるとゴチャゴチャになってきた。

特に十二月頃からは連日連夜となり、しかも爆弾や焼夷弾を落としていったので、都民は皆寝不足に悩まされるようになった。一機だといって馬鹿にしていると爆弾や焼夷弾を落とすようになっていくので、よく見張っていなければならぬ。実際、私の家の近くにも爆弾や焼夷弾が落ちて友人や知人が何人も亡くなった。当時、私の一家は下谷区仲御徒町に住んでいた。

昭和二十年三月九日、例の如く空襲警報が鳴りラジオのスイッチを入れると、いつもと少し違って「敵は南方洋上に数梯団あり、本土に向かいつつあり」という。いつもは、情報が入った時には既に敵機は我々の上空を通過または通過後であったので、またぞろそうだろうと馬鹿にしていたら、上野の森の高射砲が急にグワングワンと物凄い音で鳴りだした。恐ろしく大きな音だった。慌てて我が家の防空壕に飛び込んで様子を見ていたが、しばらく経って少し静まったので外に出て見ると、B29が嵩にかかって次々に、しかも低空でやってきて、爆弾や焼夷弾を落としていく。B29の銀色の機体から弾倉を開いて焼夷弾を投下する様までハッキリ見えた。当時のサーチライト（探照灯）は相当完備されていて、よく敵機を捉えた。焼夷弾を落とす時、長いリボンのようなものを付けて落とすのだろうが、それが燃えてチカチカと火の粉のようになってしまうのを見えた。

幸い、私の家の上空を飛行機は通り過ぎて行ってしまったので、直接の被害はなかった。寒い日だったし、風がすごく強かった。少し静かになったので外へ出て辺りを見回すと、本所・深川あたりの空が真っ赤だ。我が家は大丈夫だと思っていたら、黒門町あたりから火の手が凄い勢いで迫ってきて、昭和通りを瞬く間に火焰に飲み込んだ。もう余裕はない。危険を感じりヤカー一台に食料と布団を少々積んで上野駅方面へ先発、

私一人で逃げるように指示を受けた。総指揮官は親爺だ。

とにかく風が強くて、昭和通りは火の粉の河である。防火水槽の水をかぶり、布団に火がつかないようにと水をかけながら、必死にリヤカーを運んだ。多くの人が列を作って逃げていたので、急いで一人だけ先に行けることもできない。どの位時間がかかったか判らないが、ヤットの思いで上野駅前の地下鉄ストアー（現在は無い）近くの焼け跡に辿り着いた。

上野駅周辺は数日前の空襲ですでに焼野原になっていた。私たちにはよい避難場所だった。既に何十人かの人たちがここに来ていた。寒い、とに角寒い。焼けたトタン板で風をよけながら、お袋の作ってくれたオニギリを食す。最高の美味だった。水はアチコチの水道管から噴き出していたので、これで潤した。ガタガタ震えながらも、とに角夜が明けてきたので、我が家の焼け跡を見に行くことにした。我が家の周りは全部まさにスッパリと焼け、残り火があつて煙が出ていて、すぐくけむかった。

我が家の防空壕にはあらかじめ畳を数枚かぶせ、水を充分湿してあったので、表面は燃えていたが下の方は助かっていた。中の荷物は全部助かった。皆で喜び合った。しかし、これが逆にお荷物になった。洋服でも家具でもミシンでも良いものが助かり、普段ものが不足した。特に下着類やハキモノに困った。

一家はその後、本郷の今の医科歯科大学に避難した。親爺の友人が茶碗・シヤモジ・箸・包丁・塩・醤油など、色々なものを持ってきてくれた。また、大学の人達からも差し入れ物を頂いた。有難かった。

三日後には親爺の友人の勧めで池袋へ移る。焼け残りの衣類や家財道具をリヤカーに積んで、中山道を引きずるようにゾロゾロとほとんど無口で歩いた。

池袋でも結局焼け出され、またぞろ世田谷の奥沢に移動、此処も焼け出され、親爺やお袋の実家のある富山に満員列車に揺られて引越した。

富山の親爺の実家は大きな家であったが親戚筋も多く、一緒に暮らすことはできなかった。

吉岡一家の近況

妻と二人で静かに暮らしています。幸い、私は元気ですが、妻は年齢とともに色々故障が出てきています。気持ちちは二人とも元気です。